



## 恩を返す

吳 雪  
WU XUE

1月17日、真冬の早朝、暗く寒い中「プルルルルン」と携帯電話が鳴っていました。まだ熟睡の中、電話に出ました。電話を切ったあと、谷底に落ちっていくようで、怖くて悲しく、涙が止まりませんでした。夢だと思いたくても夢ではありませんでした。母は重い病気に掛かり連絡してきました。

私は技能実習生として去年の秋、日本へ来ました。一人で荷物を背負い、家を離れるのは初めての事です。母が別れ際に私の手を握りながら「夢を叶える道は苦しい時もあり、楽しい時もあり、諦めずに頑張るんだよ」と言って、別れを惜しみました。

8歳頃父が仕事でコンゴへ転勤しました。学校の始業や終業も父が欠席で、クラスメートから父がいない子供だと言われたこともありました。少女時代は母と二人で互いに頼り添って生きて来ました。

母の電話が有ったとき、ちょうど日本へ来て4カ月が経ち、仕事や生活に慣れてきた頃でした。会社の同僚、上司、組合方々が色々親切にしてくれ、異国にいる違和感が余り有りませんでした。正直今の生活から離れたくない、働きたいのですがそんな自分勝手な話はありません。母のことを一番思うと、やはり帰らなくてはいけないし、色々迷った末一時帰国することに決心しました。

母からの電話の翌日、落ち込んだまま会社へ行き、上司へ母のことを報告に行きました。直ちに生産現場と総務の方が協議し、40日間の一時帰国を許して頂きました。再び仕事の機会を与えて頂けることに信じられませんでした。会社に熱い信頼感を感じ感無量でした。

すぐさま、組合の方が空港まで同行頂き、心や花の形をしているような菓子を持たせてくれ、「お口に合うかどうか分かりませんがお母さんと召し上がって下さい」思わず先生と抱きしめ、「ありがとう」と泣き出してしまいました。会社と組合の方が親のようで、ご恩は決して忘れません。

帰国してから、母の放射線治療の為、病院へ付添いの毎日です。家へ戻ってきたせいか母の顔色が少しずつ良くなってきました。2月15日は旧暦の大晦日です。母と二人でごちそうを作り乾杯しました。その日は日本側でも賀詞交歓会が行われ、同期の実習生達は「恩に感ずる心」という曲名のダンスを披露しました。本当は私がその中の一員として一緒に踊りたかったです。

母の治療も一段落し、少し落ち着いてきました。2月28日私は予定通り日本へ戻りました。飛行機から降り、青い空を眺め、清々しい空気を吸い、「日本ただいま、戻ってきましたよ」と心の中で叫びました。

中国には「一滴の水のような恩にも、湧き出る泉のような大ききでこれに報いるべし」という諺があります。長期一時帰国を許して頂いた会社へ恩返しすべく技能実習生の生活を送りたいと思います。

国	籍	中国
職	種	プラスチック成形
実習実施者		テイ・エステック株式会社
監理団体		ELC事業協同組合